

翻
刻

みちのつと
(小池道子著)

解題

小池道子著、宮内省皇后宮職、明治二十四年二月刊。四ツ目袋綴。全一卷、七十丁。本文は漢字平仮名交り文。高崎正風「序」一丁、税所敦子「序」二丁、本編六十四丁、小池道子「あとがき」二丁、奥付は「明治二十四年二月 皇后宮職印行 権掌侍正七位小池道子著 御用製本人 吉川半七」。明治二十三年四月から五月にかけての、昭憲皇太后の行啓の様子を小池道子が著した日記。昭憲皇太后の側近が著した日記として、宮内属小出繁「みくるまのあと」（明治二十四年二月）・皇后宮大夫子爵「繫暉日記」（明治二十六年十一月二十二日刊）とともに、行啓の様子を伝えるものとして重視されている。

小池道子は水戸藩士小池友徳の姉。有栖川宮家に仕え、後に宮中に入り掌侍となり昭憲皇太后に仕えた。歌を中島歌子に学び、御歌所の一員となった。本書の「序」を著した税所敦子に学ばれた後、御歌所を所管した。昭和四（一九二九）年八月、八十五歳で歿した。

本書は、当時権掌侍であった小池道子が、明治二十三（一八九〇）年四月四日から五月七日のおよそ一カ月に及ぶ京都・奈良・兵庫への行幸啓の様子を著したものである。行啓の経路、移動手段等にいたる、詳細な記録が記されているのはもちろん、昭憲皇太后をはじめ同じく行啓に従った柳原愛子・小出繁らの歌が記されている。『みちのつと』との題については、高崎正風の序文にて、税所敦子による序文の、末文から採ったことが記されている。また、小出による『みくるまのあと』の題にもなった「此春の夢の胡蝶はいてましの花見車の跡や逐ふらむ」という高崎正風の歌は、本書にも記されており、本書と『みくるまのあと』との史料の相関性をうかがわせるものである。『みくるま

まのあと』については、戸浪裕之「翻刻 みくるまのあと（小出繁著）」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十八号、平成二十三年）の解題を参照されたい。

小池の著作には、本書の他に、歌集である『柳の露』（明治二十九年刊、佐々木信綱編『明治名家家集』博文館、明治三十三年所収）がある。その構成は、高崎正風の「序」、「春」、「夏」、「秋」、「冬」の各季節の歌、「恋歌」、「雑歌」に続き「故御息所の御歌のおくにかきて大将の宮に奉りける」「いつくしまの図のおくに記せる詞」となっている。本書を理解する上で重要な資料となるだろう。

凡例

（高野）

- 一、底本は明治神宮蔵本を使用した。
- 一、底本の文体を損なわないよう注意し、字体は原則通行のものに改め、特定漢字のみ原文のままとした。
- 一、仮名遣・踊り字は原文通りとした。

此日記のなをえらひてよとあるにとかうおもひめくらすまでもなくやかて叙文のすゑのことはをとりみちのつと、なつて

従三位正風

もたらしくなには

あれともこののは

みちのつとこそ

えまくほしけれ

昔より道の記なといへるは大かた物まうてあるはゆあみなど心のかなる旅人のすさひなめるをこは三月の末より四月の始をかけた上は名古屋の大演習にのそませ給ひそれより後の宮とともに西京にみゆきさせ給ひてやかて神戸より軍艦に召されくれのみなと佐世保港などへわたらせ給へるほと宮は仰によりてうねひ山のみさ、きにまうてさせたまひ御道のつてにならの京よりよしの、みやのふるきあとを御覽し二十五日にはまひこの浜におはしまして鉄道開通式をみそなはずなとおほやけこと、もおほかる御旅路にしたかひたてまつりてことにおほみやつかへいとまなきほとなから日ことに大まへわたりよりわたくしさまのこまやかなること、もまた筆にまかせてとりもつくろはずしるし置きたまへるかいたう深きまこ、ろ見えてなか／＼にみやひをもとめたらんよりもきはことにめてたうおほえつ、むなしく御あとにと、まりてゆかしうのみ思ひやりしところ／＼のありさまもこのまきをひもとかま、にまのあたり見るこ、地せらる、は世にふたつなきことのはのみちのつと、もいはまほしうこそ

敦子

三月廿八日暁より雨降る午前七時大みけしきうるはしう出立せ給へり劍璽は高倉典侍柳原権典侍さ、け奉り給ひて富小路侍従東園侍従に渡し奉り給ふ皇后宮は新橋まで送らせ給はむと出立せ給へり雨いよ／＼ふる長き御車の内いかに座しますらむと只空のみ打守らる宮帰りははしませ給ひて御行装厳に立せ給へる御物語とも為させ給ふ五時過る程名古屋に着かせ給へる電報あり今夜は宮の御別れの御うたけに御息所たち大臣顧問官などの北方召させ給へり廿九日今日も雨いみしう降る半田に渡りましたす可き日なれば殊に安からず打なめさせ給へり人々も何事も忘れて例の空のみ打守る今夜も御息所北方たち参り給ふわれも召されぬよへも今宵も室内音楽あり奥に入らせ給ひて後竹豊にて御舟に召させ給へる電報ありいかなる所にてあかさせ給ふらむといとかしこし世日てけよし演習も殊に勇ましますすらむなと御上の事にのみ過させ給ふ行啓近く成るま、に参り給へる人多し御苑の花も見捨てやまむは口惜しと思へと吹上まで出てむ暇無ければ園権典侍姉小路掌侍など、紅葉山のわたりより堀きはの木陰尋ねありく且見なからもなと思へと歌もえよます

世一日雨はいみしう降るあやにくなる空かなと例のなめさせ給ふ一時過る頃より柳原権典侍生源寺権命婦と共にうち連れて東宮に参りぬ御前近う侍りて宮の御ことつとも啓す御学ひの暇なるへし御遊ひかたきの君たち召し集めて暮うたせ給へりか、る御遊ひの折の言草のはしはしにも心を用ひてかしつき仕へらる、人々の用意有難くおほゆをと、しの夏悩みおはしませ給へる時上も宮もおほつかなからせ給ひて樹下掌侍姉小路掌侍と吾と日毎に交る替る参りて見奉りし頃はいわけなくおはしましつるをいたくおよすけさせ給ひて折々は戯れさせ給ひなからしめやかに物なとのたまはず内にて見たいまつる折はかうしもおはしませすとかしこ

けれど打守り奉らるゝを老いたりとや見そなはせらむ暮れぬ先に暇給はりて帰りぬ今日は名古屋に帰りましましたる由電報ありと承る

四月一日天気よし十一時はかりより常宮参り給へりうるはしう肥えさせ給ひて御まみの匂ひなつかしう愛きやうつき給へり宮の御衣を引かせ給ひて誉めさせ給ひ人々にも見奉れとのたまはせる御有様めてたう見奉らるゝに宮も打笑みて見奉らせ給ふ今日も参り給へる人多し三時頃より皇太后宮に渡り給ふのとやかに御物語とも為させ給ひて大御酒まるらせ給ひ人々にも給ひぬ暫くの御旅なれとのこらせ給へる御心も出立せ給へる御心もいかにと推し量り奉らる

二日雨小倉権典侍樹下掌侍を始め先つ出立ち給ふ

三日昼の程は暇給はりて旅の用意に暮しぬ夕つ方参りたるに御まうけとも整はせ給へり人々より饒けの歌奉りたれば見よと仰せ言あり御歌の師なる高崎宮中顧問官

三芳野の千本の桜残りなく咲み綻ひて君を待つらむ
古の雲井の桜みそなはす御衣の袖に露や散るらむ

此春の夢の胡蝶はいてましの花見車の跡や逐ふらむ
愛たうも読まれたる物かなと又打返し御覽す税所権掌侍より

見まさすは匂はむかひも有らしとや御苑の花のまたき散るらむと聞えさせ給へはとみに御視召して

散る花のこすゑはおきて春寒き風をそ厭ふ老人の為めと給はりぬおはし坐さぬ程のさうさうしさもかゝる忝き仰せ言に慰み侍らむなとかしこまり給へるさま理りなり同し君より我には
遠さかる程を悲しき思ふ友御供に立つは嬉しけれともと有りけるに

憂きことを知らぬ旅路に悲しきは君を残して出るなりけり

四日空うらゝかに晴れ渡りて心ちよし晝に起き出で旅の装ひ取り繕ひて参る御気色麗はしう残り給へる人々に仰せ言とも有りて七時に御車寄より出させ給ふ嬉しき旅なれと顧みかちなるに御苑の花の蔭松の木の間にしひて見送り奉れる桂袴となりけり正門の内には華族女学校の生徒立並ひて送り奉る整列したる兵隊幾はくならむ次々に送りたいまつれる人数知らす車の内に在りてもまはゆき心ちす残り給へる人々の上なといひ続く折昨日師の君より別れの歌おかせ給ひしを返し聞えさせすと愛子の君の語り給へるにねたうなりて

聴くかひもあらしと思ひて鶯の吾には声を惜むなるらむ石筆もて書かむとすれと車のとよみにて書かれす新橋にてかいつけて帰り給へる人に言伝て、聞えさせむと思けるに人々打興して今そこに見え給ひしを呼びて参らせよとて呼び入れ給へりをこなることいひてけりないかにせむと思へと言はて止むへきにも有らねは参らせたるに打ゑみながらやかて名刺の裏に書きて給へり

鶯も鳴かすなりけむ言の葉の花の匂ひに心おきて常に誠め給へるにかはりて花の匂ひなどのたまへるはとをかし御車整ひぬと聞えさするに出立せ給ふ大宮より万里小路典侍御使に参り給へり御言伝ともしめやかなる御有様なり東宮は御傍に立せ給へり常にかはらせ給ひて打しめらせ給へるに御手を取らせ給ひて学ひの道にな怠らせ給ひそかくおとなしうおはし坐すを奏し侍らむなどのたまはずればうなつかせ給へるいと愛たし姫宮にも御顔を撫てさせ給ひて物のたまはするを打守り奉り給へるは常にかはりたりとおほすなるへしおひたゝしう集ひたる人にも懼かさせ給はりて宮のおはし坐す方のみ見遣り奉り給へらうたき御有様なり御息所たちを始め大臣北方たち内よりは千草権典侍姉小路掌侍送り仕う

奉り給へり動き初めたりと思ふ間も無く遠ざかりぬ品川沖うち和きて舟の帆影数知らず又こなたを見れば白う打晴れたる富士の嶺始めて見る物よりも珍しう其方にのみ向ひかちなり大磯近う成りぬ敦子君の此わたりに人の案内しつれば十時頃の汽車にて行かむと語り給ひし事を思ひ出つ

君待ちて行かまし物をこゆるきのいそく旅こそすへ無かりけれ長き御道筋に停車場はいふも更なり其間にも某の学校と書いたる旗押立て、迎へ奉れるを御覽しも洩し給はぬいと忝けなしいつゝにてか有けむ高倉典侍

国守る道を学へるうなみ子の末頼もしく見え渡るかな山北にて御供の車ををりぬ函根の谷川涼しう流る、さま殊に目にとまる函根山谷の下水細けれとみなさる音の高くも有るかな田はまた返すへくも有らずれんく糸草植ゑたる如く咲きたり細き畔道を辛うして老人の走り来るに御車早ければほのかにも見奉らざりけむと思ふにいとひん無し富士の嶺はいよ／＼近う成れりまた昼にも程有るにかう遠くも来つるかなと更に打驚く所の名ともくはしう聞かまほしけれとさる可き人も無し日頃齒の痛みし余波にや肩痛みて筆取り出むもうるさければ只高嶺をのみ打仰く

心行く春の旅路に富士の根もまはゆき迄に晴れし今日かな海原のけしき将いはむ方無く心の塵も打払ふ可し倉沢のわたり人伝に聴きしは愚なりをのこたちは珍しけ無きにや居眠り打ち為たり実に御設けともに勞れたらむを余りに物問はむもうるさからむとて停車場の駅の名に心認めて後に人も問ひ画図にも合せてむと思ひ置く浜松にて車の止りたれば御前に参りぬ三保の松原は見つやとのたまはず夫のみは見侍りにたれと問ふ人も侍らす有りしやう啓すれば咲はせ給へり太夫さふらへは案内乞へとのたまはずされと車の響きに聞き取れぬこと多し愛子の君に歌や読み給へる見

せ給へと責め聞えさすれば見せ給へり

ま鉄路の斜めに成りし程見えて富士の姿の変わりぬるかな水の上に乗の掛りぬと思へは新井の渡りなり始めての旅路に打驚かる、迄面白き海山多かれと此わたりの景色更に譬へむ方無しいかにしてか、る橋は渡しけむと工事の巧みなるを思ふか内に打過ぎぬ五時に名古屋に着かせ給へり親王たち大臣たちを始め迎へ奉れる人数知らず

大前に候ひ馴れし人見れば都に着きし心ちこそすれ行在所は東本願寺の別院なり道の程聴きしより遠き心ちす拝み奉れる人夥しういかなる道とも見え分かぬ迄なり上は日頃の演習にも勞れさせ給はず大御気色麗はしう座します愜しき譬へむ方無し先大宮の御言伝や申させ給ふらむ受けさせ給へる御用意いと畏こし国の親と仰かれ給へる御身の御宿世事新らしきやうなれと有り難くこそ演習の因なととうてさせ給ひて見せ参らせ給ひ宮の太夫など召して見せ給ふ侍従たち渡りに候ひ給ひて様様の物語りし給ふ甚しとも甚しかりつる雨をも聊厭はせ給はていそしませ給ひ或時は兵と共に同じ所にておもの聞し召し或時は奇しき物にて水奉りなどして西に東に御馬を走らせ給ひし御有様の世に有り難き事ともを承はりて皆涙打ち拭ひぬ

丈夫に有らぬ我さへ身を捨て、仕へまほしく思ふ御世かな所の産物とも御覽せさせたるを其儘連ね置せ給ひて宮にも見せ参らせ給へりかくおほむ暇座しまさぬ中に民のなりはひを励し給へるおほむいづくしみこそ有り難けれ

五日雨暁に起き出で

旅そとも知らず眠りぬ御車の止る所や都なるらむ十時の御発車と定りたれば御先に立出つ停車場には送り奉れる人夥しければ車に乗りて待ちたい奉るいかなる事のかかひ目に可有

りけむ午時過ぎて立たせ給ふ可き事と成りぬと承はる御調度やうの物も早う出たし遣りぬれはいかにおほし座すらむと安き心無し程無く人のとよめく音するは何事そと問ふに今渡り座しますなりといふに車よりおりむと為れはい自然らすといふかう間近き所にたに事の違ひ目は有る世なりけり

車にて待つたに有るを都人行幸遅しといかにわふらむ午時過て渡らせ給ひぬ時の間も三日四日過ぎたらむ心ちして迎へ奉れる嬉しき限り無し親王たちを始め軍人あまた立ち並びて送り奉れる敵に尊し今日は車の内によつ案内する人有れといかにせむ雨打ちしふきて玻瓈の窓も曇り果てたり木曾川の渡りこ、ならむ伊吹山も此わたりより見ゆらむなどといへとかひ無し米原にて御前に参りぬ近江の海末霞み果て、淋しき雨の景色なり三上山鏡山も雲深ければ明亮ならずあたらし名所を見ずして過ぎ行く口惜しさいはむ方無しとかくする程にあけの鳥居見ゆ伏見の稲荷なるへし七条には山階宮を始め人々迎へ奉る内迄の道人の絶間聊も無し南門より紫宸殿の階を昇らせ給へる御うしろに候ふ心ち譬へむ方無し高うかうかうしき御しつらひと昔懐かしう打仰かる、に況して住ませ給ひし世をおほし出てさせ給ふ事多かるへし御先に着きたる女官は多みの眉開けて見ゆ御学問所にて供奉の人々の御悦び奏するを受けさせ給ひて常のおましに渡らせ給へり此日頃所狭き所に座しましていみじき雨をも厭はせ給はす野に山に御馬を馳せさせ給ひしおはん勞れも憩はせ給ふらむといと嬉し

六日朝晴例の時御格子明く勞れさせ給ひたる大御気色もおほし座さて出てさせ給へり宮もいと麗はしき御気色なり大前わたり暇有る程に高倉典侍柳原権典侍と御庭に出てたるに侍従たち何事をか掟て給ふらむ下司に物のたまへり堀川侍従案内為給ひてこ、らのおましを見奉る先小御所の御しつらひあてに愛たう御さうしに

は名所の四季の絵を書かせ給ひて讚は先帝の御製を始め奉りみこたち公卿たちの歌を色紙に麗はしう書成し給へり清涼殿の廊には年中行事の御衝立たてり鳴る板を踏みおましに入る御帳台もさなから居置かせ給へり櫛形の窓などの雅ひなるいはむは中々なり御苑には呉竹苦竹緑に立栄えたり朝餉の間よるのおと、弘徽殿の造りさまあてに愛たき事限り無し紫宸殿に入れば知らぬ世の節会など面影に見ゆる心ちし左近の桜盛りに咲き匂ひたり

君待ちて盛り成りし九重の御階の花は心有りけり今日は空も晴れぬ嵐山の花また散り果てぬ由なれば行きて見よと宮の免るさせ給へる嬉しき事限り無し二時過る頃より柳原権典侍北島權掌侍吉田權命婦と我とひとつ馬車に乗りて出つ道の程田舎の景色えもいはす面白し蕪菁の花麦生緑限り無く続きたる誠に心行く道なり彼方に見ゆるか御室なり此方に見ゆるか東寺なりと案内人いふ嵐山の花は残り少く成りたれと大方の景色聞きしに勝りて面白し何かしの楼に暫し憩ひて見る程に

疾く行きて疾く帰らむと思ひしも忘れ果て、花を見るかな大前わたり人少な、るに心遣ひして出てたれはなりけり舟にて見たらむにはいかにをかしからむと口々にいふ暮れぬ先に帰り参らむと立ちなからせめて岸近くたに行き見て見はよとあゆみかけたるに衣服などの珍らしきにや人打集ひて行先さへ見えす宮の属いたく制すれとも聞入るへうも無し為む方無くて車に乗りぬ

嵐山花見る友と思ひしは花を隔つる友にそ有りける筏は繋ぎし儘にて指す人も無し道に童の花売る有り求めさせても帰る人の家に咲きたる花は盛りなるか多し所に車止めて所の名とも問ふ小督局の旧跡渡忠秋翁の碑なと有りと聴きて尋ねたれと知れず清涼寺に入りて釈尊の御像拝みなどとして出つ例の野道を過ぎて顧れば過にし方黒う雲立ちて物凄き景色なり分けにし花の影いかに

といふ間も無く霰降り来ぬ車の外に乗りたるをのこ腕車に乗りたるをみなともは皆濡れ透りていとほしう見ゆ

七日晴雨定まらず今日は尼宮たち宮の御母君を始め先朝に仕へ奉りし女官たち皆参り給へり大前近う召し出て、御対面有り宮も御傍におはしまして御手つから物給ひなとす申の口におり給ひて昔今の物語など為給ふ懐かしき事多し女官たち容なとねひたれと猶盛りなるを花やかならずしなしたる用意いととほしう見ゆ夕暮より御土器給はる宮近く出てさせ給ひてしめやかに御物語とも為させ給ふ今様の御衣を珍らしみゆかしかり給へは御手の御飾なと取らせ給ひて見せ給ふあなかしこあなかしことゝみさり寄り給へる老人たちの心いかならむ瓶子取らせ給ひて御酒す、め給ふに忝み給ふ気色理りなり

八日晴午前九時三十分御門を出させ給ひて泉山に行幸行啓有り泉涌寺にて休らはせ給ひ上は御馬にて先出て立たせ給へり宮は御板輿なり階の許にておりさせ給ひ高き坂を幾はくと無く登らせ給ふ深山木生ひ繁りて岩の隙より滴る雫寒けなれと御笠仕う奉りたれはいと暑し漸々に登り果て給ひて御手水仕うまつり拝み為させ給ふ御後にぬかつきて

おのつから袖こそしめれ御陵の山の梢も露や置くらむ上は一
度還幸ならせ給て高等中学校に行幸有り宮は東福寺に参らせ給ふ
後大勝寺公の御墓にて

百敷の大内山の月のかけ苔の下まで照りとほららむ寺にて休
らはせ給ふ通天橋を渡る両側に若木の楓若葉さしたり昔は枝交は
すはかりの古木多かりしを故有りて皆伐り払ひたるなりと人の語
るを聞きて

大寺に千年を経たる紅葉も常無き秋は通れさりけり本堂など
誠にいかめしかりしを往にし年焼け果てたりとそ昼のおもの奉り

て此奥に在る月輪閨白の御墓に詣てさせ給へり両本願寺の法主案
内仕う奉り給ふこ、より盲啞院に渡らせ給ふ物いはれぬ児らに物
教ふる心尽しいかならむ能く見取りて苦しげなからいひ続けるを
聞くも胸痛し盲人も算術を始め読書外にも習ふ限りの事とも御覽
せさすか、る子をしも持たらむ親の心思ひ遣られていと悲しさは
れ世に廢れ人と成る可きをか人並々の業教ふる道を履み開き給
へる御世に逢へるは暗夜に燈火得たる心ちすへし宮は殊に御心留
めさせ給ひかやうの事はいかに忝く思ふらむかし内に帰らせ給ひて御
湯仕う奉りなとす威仁親王御息所と共に参り給へり往にし日外国
より帰らせ給ひしに此京に坐します程なれはとて昇り給へるなり
けり椅子給はりてしめやかに御物語有り御二所とも漸々にねひさ
せ給ひて幼き宮の物し給へるもにけなからぬやうに成り給へりと
打ち守り奉らる前田從三位北の方も又随ひ奉りて帰りし人々さる
へき限りは皆謁を給はりぬ

九日晴疎水式に臨ませ給はむと午前十時に御門を出てさせ給ひて
行幸有り十二時より宮は出てさせ給へり暫くの暇給はりて修学院
に参る例の田舎みち心安く面白し先下の離宮に入りて案内求むる
に殿守悦ひ出て迎へて戸あけなとす今日はあわた、しう出て立ち
たれは大方のみ案内してよといひて御茶屋の有りさまのみ外より
拝す御庭は広からねと木立物旧りて面白く造りたる中に花の盛り
に咲き匂ひたるいとをかし鰐口の燈籠といへるありこれなむ名高
き物に侍るなといふ木戸を出つれば畑なり畦道を経て上の離宮
に昇るこ、の殿守も悦ひて案内すこ、に行幸は坐しませすや行啓
はいつの頃にかなと心一つに定めていふも理りなり先つ年は女官
たち屢遊び給ひしをこたひはなとか見え給はぬなといふ隣雲亭の
板敷にて休らひながら見渡すに打ち霞みたる遠山も野辺の蕪菁麦

生も只御苑の物なりけりあなたに見ゆるか嵐山こなたか愛宕衣笠
なり少し隔て、低く見ゆるか舟岡なりなど例の案内人いふ傍へに
利休形の燈籠など有りて雅ひに物さひたる御苑の景色短き筆に書
かむは中々なりや同じくは内に入りて殿の造りさま残り無くなど
忠やかにいへど心のせかるれば御苑のみ巡りぬ比叡の山より落来
る滝の音涼しう谷川のやうに岩ほの欹てるに触れて流る、景色奥
山に入りたる心ちす窮邃軒を過ぎて石橋を渡る誠にかめしき石
なり光格天皇の御代に水野越前守の奉られしなりとそ池の辺りは
珍らしき木立多かるに打ち交りたる桜のはらはらと散り来るさま
友無くて見るはいとかひ無し赤山の御社も近く見えて景色を添へ
たり本の道に出てたるにいかにも急くとも中の離宮を知らぬは口惜
しかるへしといはれて又畦道を走るやうに歩み行くこゝにも殿守
出て立ちて案内す此殿は東福門院のおましを移させ給へるにて麗
はしき造り様なり御杉戸の画の鯉の由縁など細やかに語れと例の
うちにはいらす御そのには杜若などあり夏のけしきことにやあら
んみついちの上に見ゆるは林丘寺の宮のみあととなりとそ今すこし
めぐりてよとす、むれといそきてもとのみよりかへる山はな、
る何かしの家に入てしはしやすらふ車引人にもものたうへさせんと
てなりたか野川のなかれ清くしてしからみにかゝれる波のけしき
えもいはすおもしろしかうやうのところ老ての後のいほりむす
はまほしうおほゆかり橋をわたりて松かさきの方よりかものみ社
にまうつみたらし川の水くみあけて手洗ふに心もすかすかしうな
りぬ馬場のかたへのさくらのもとにむしろ打しきてあそふ人々々多
かり

かも山の花のさかりのきはひを神もうれしとみそなはずら
ん見まほしき所多かれとれいの車はしらせて下鴨にまうつまつり
のまうけにかあらん宮人まくなととうて、ほしあへりはるかに挿

み奉りていつた、すかはの水底清くしてたちざりかたけれと時計
をみれば二時過たるにおとろきていそきかへりぬ

十日晴九時三十分御かとお出させ給ひて博覧会に行啓あり赤十字
社員に謁をたまふ仰ことは小松宮つたへたまへりつらぬしものと
もねもころに御覽してかへらせたまふ午時過てより御学問所の御
庭にて飛鳥井雅望卿などの蹴鞠御覽せささうそくよりはしめて
立ふるまひすへてむかしにあへるこゝちしてなつかしう見ゆ宮
の御方には内大臣の北方にしひかしの本願寺の北方参り給へりわ
たくしさまには大坂にすめるいもうと国子こともふてとふらひた
りをさなことも人にいざなはれていつくまてかまゐりけん物たま
はりぬといた、きもちてかへりきたりためしすくなきよのめいほ
くあまりにかたしけなくてむね打さわきぬましておやの心いかな
りけんぬかつきたるまゝ、にしてしはしは物もいはれず

十一日午前晴いとまたまはりて午前十時に内を出て近江にと心ざ
す北島権掌侍吉田権命婦女孀三人その外したかへる女とも、あま
た出たれば車多く引つ、きたり出んとする時愛子君より

言のはの花まつけふはもろともにゆかぬうらみもおもはざり
けりと有けるに

いかなれはおなしたひちにおいてし身のおなしとこころにゆかれ
さるらん宮の属矢野氏近江人なればけふそこまやかにあななし侍
らんといひて先にたちつ、ゆく処々に車と、めてこゝはなにかし
のやしろにて侍りこゝそなに寺なるなどいふ田舎人のはしめて都
においてたらんやうに物とふさまよそに見る人いかにをかしからん
山しなにて天智天皇の御陵をはるかにをかみ奉るはしりるを過て
あふ坂山にかゝる蟬丸の社有また関明神蟬丸社と書たる碑あり山
のうへはよく見えねと関の杉村など歌によめるは此わたりやあ
らん大津の駅にてしはしやすらひて石山寺をさして行にあはつ

はらを右にみる例の麦とす、なのはらなり義仲朝臣の塚兼平のはかなとをしふれとはるかにてきたかならずとかくするほどに石山にいたりつきぬいはほのすかた聞しにまさりてめつらし本堂にまうてて観世音ほさちをふしをかむけに千とせへにけんあと見えて物ふりたるいとたふとし源氏の間にいりてみるたなに宝物ともありいたうくらけれとむかしはこ、よりみつうみも見えし也といふむかひのろうのやうなるところに紫式部の画像の軸かけて自筆の大般若經の巻物手ならしつる硯石など有けに仏にちかひをかけ奉りてなかき物かたりもかきおほせけんといとたふとし物かたりはさておき人からのめてたかりしこと、も忍はれてふしをかむこをいて、すこしのほれは大日如来をいつきまつれる堂有こは頼朝公のいつきたまひしなりとなん頼朝公の塚乳人のつかなどあり月見台にのほるこれはいたく年おくれてたてしなるへし見わたすあたりは湖水もや、はてにてし、みとる舟なといさ、か出たるのみかへりみちにつりかね堂あり五十あまりならんと思ふをうなめて此かね龍宮より寄付のなりつきたまへ／＼とせむれはこ、ろみにつきてみるにたやすくなりたりみなひとわらひながらに手々につくあまたのひとなれはしはしはなりもやまさりけりいさこの人々をはかならず極楽にいさなひてよといへはをうなもわらふきさはしをおりてゆけはあか井あり岩のひまより落くるさまけに靈水とみえたり本堂の観世音ほさちの下よりかよふといふ左もみきもみな寺なりみちにはさくらまはらにさきつ、きたる見所ありみまほしき所多かれとくれぬ先にかへりまあらんとおもへは心せかれて立いつもとのみちをかへるむかひの、へに秀郷のやしろありといへと遠ければ見えすせ、の城はかこひのみいさ、かのこれりもとやすらひし大津の坂本やにかへりてひるけたうへぬ時計をみればはや二時過たり此家はさきつとし行幸のをりはた大宮の行啓あり

しをりもやすらはせたまへりとそかきりなき湖水の上にはれたる三上山のけしきえもいはすかたへに見ゆる鏡山もくもりなしひらのねは立はなれてかすみたれと高ければまかふへくもなしひえの山は物のかけになりたり打霞たる舟のほかけ処々に見ゆるけしきいはんかたなしこ、よりから崎にと心さす志賀の宮の跡はいつくにかあらん田畑のみなり

さ、なみの大津の宮はあともなし高きみいつはよにのこれともかた、をひたりに見てから崎にといそく先神垣にまうて、松をみるよにひとつ松といふけにことわりなりみき枯てよりおとろへたりといへとか、る老樹またよに有へくもあらず神木といふにやあらんかし雨ふり出たれは心せかれて車をはしらす三井寺にのほるにいたく物さひたり本堂はしめ切て人けなし弁慶のしるなへ／＼とよふかたにゆきて見ればあやしげなるこゑして鍋のゆかりをつ、けいふかたはらいたき物から中々に興あり物とらすれば又いふを若き人々いたくわらふそれよりつりかね堂の方に行是なんむかしみあてら／＼となりたりといひつたふる鐘なりけるかたへに有か三井の水なりとこれによりて山の名とはせしなりと人のかたるあたらし靈地の人けなうあれ行ん末思はれてしはし打なかぬ今すこし分いらはやと思へと雨ふりいて、空のくらうなるに人めまれなる山路す、ろに物心ほそし観世音のみ堂にまうつればいたくにははひたりかたはらの台にて眺望すみつうみのこりなく見えてけしきいはん方なしと早くはこさりけんとおもへと山きはくらくなり行にこ、ろもとなくて立いつきさはしすへりて心のみいそけとおくれかちなり糸子君はかららかにおりたまへるいとうらやまし山しなわたりにて日はくればはてぬ

十二日てけよし大前にて昨日の湖水のけしきともかたらひつ、け、るに田舎人のはしめて物みたらんやうにかしましうも有かな

あかたのつかさになして山林のことやつかうまつらせんなど興せさせたまへるもいとをかしけふほうへ山階宮にわたらせたまへり能楽ありて御興多かりきとそみともにさふらはねはくはしうはしらす

十三日てけよしけふはいさ、か御いとまやおはしますすらん御前わたりしめやかなり泉殿にてひるのおもきこしめしなとす細川峰子君此都にあそひたまへりとてまゐりたまへりくつつかたより柴山ます子君小川昌子ぬし三輪貞信尼など打くしてとふらはれぬうれしけれといそかはしき折かなれば歌よむいとまもなくてかへしぬ

十四日雨まゐりたまへる人もあれとしるすへきこともなし日比のそ、ろありきにやつかれたりけんおましのわた殿にさふらひなからねふけもよほしたるをりしめさせたまひてくた物たまひたり茶もてまゐれと仰られたるをかしこまりてわかとちのと心得ていそきと、のへさせてもてまゐりたれば柳原権典侍の何をかもてまゐりたまへる奉れと仰られたるにこのたまふむねさわきてあわた、しうてうせさせて奉りたるにいきたなかりけん中々にと興せさせたまへるもいとくをかしかりき

十五日雨いたくふる寿子君愛子君とひとつ車にて北野の神社にまうついかめしきみやしろのうちよく見奉らまほしけれと雨いたくふりて衣もしほるやうなれば板しきの上にてふしをかむ千本の松はいつくそと、へは此わたりをいふなりといへと多しともみえず平野の神社にもまうついさ、かの道車ゆかねはあゆむほといよく大ふりになりてせん方なし花さかりにてかたへの家にはあそふ人多かれと物みるこ、ちもせずかゝる日にまゐるをこそ神もうけさせたまふらめといひつゝ、わらふ

十六日雨ことなし

十七日曇午時過して宮桂の里なる離宮にわたらせたまふ有栖川宮山階宮小松宮同じ宮の御息所内大臣北の方も宮内大臣をはしめ参りたまへり日比の雨にかつら川水かさまさりてにこれりはるかにみゆる山のけしき例の物めてする心には限りなくおもしろしおのおましにていこはせたまひてみそのにいてさせたまふみこたちみやすん所をはしめみうしろにさふらひたまふ木立岩などおもしろく物さひたるけしきおのつからなる山水のこ、ちす池のとひ石ひきくなるまで水かさまされり松琴亭にて御茶奉りゆるさる、かきりはめしてくた物なと賜はす池のめぐり木ふかきみちおくふかき山に分入やうなりみやひにたてさせたまへるかり宮のさまむかしの故よしなど人々のかたりあへるをあたはらにてき、たれとかいとむるひまなし笑意軒とか名つけたるはつくりさまことにめつらしうめとまる奈良の都よりうつさせたまへる八重さくらさかりにさきにほひたり木は高からねと苔のむしたるさまけに老木なるへし御その、まほなる方におまし、つらひて御かはらけまあるあすよりの行幸のみともにさふらひたまはん親王たち大臣たちにはなむけのみ心なるへし御さかつきまゐらせたまひ人々にもたまひなとすいぬる演習の折のうへのみありさまなと啓したまふ御瓶子つかうまつりなからふとみ池の方をみやればわかき女官たち舟に打のりて手々にさほさすさま興有さふらひたまへる人々もあなをかしてみやりたまへり五時すくるころ内にはかへらせたまひぬ十八日てけよしうへは神戸にて軍艦の観兵式をみそなはしたまひ呉佐世保の軍港にも行幸ましまさんとて大みけしきうるはしう午前六時四十分に出た、せたまへり宮は南殿の階下までおくり奉らせたまふかくて八時に宮もいてた、せたまへりかねてうへのおきてさせたまひしことく奈良よし野まひ子の浜なとめくらせたまはんとてなりけり日比の雨なこりなく晴てこ、ちよきに見奉らんと

処処にむれある人々はけに山しろの山をなしたりふしみの兵官にてやすらはせたまへりこ、は桃山城のあとなりとそ工兵ひと日の演習のつかれをも忘れてかくやすらはせたまはんことをかきこみ奉りあらたに庭をつくり池をほりたるよし燈籠などわざとめかすつくりなしたる中々に面白しめなる心はへをきこしめしてはしちかくいてさせたまひて御覽すおましには工兵のことに要あるひなかつくりなして御覽せさす鮫島中佐をはしめて故ともくはしう啓せさせたまふこ、をた、せたまひて観月橋にて水雷火御覽す馬やおとろかんとしておりさせたまひ馬車はあとよりわたすやかてふた、ひまで打はなちけるかその勢いかなる軍艦もくたけぬへしとおそろしなけ玉とかいへるもふたつありこいみしきひ、きなりかくて堤を行道のほと右は沼左は河にてまことにけしきよし宇治の上田俊造の家にてひるのおも奉るまた十時はかりなるへし朝日山まむひにみゆかたへの山も面白し橋はいたくふるひたるか中々になつかしむかひの家あわざとならす心安けなりうちのはふねなとかねてき、けるかけふはひとつたになくてさうくしきこ、ちす

みくるまのかよふみちにといてぬらんさす人もなしうち河舟このわたりより茶園多し田はたのけしきはかはることなし

行さきのかはるたひちにかはらぬは麦とす、なのはたけなりけり村山とも多かれと馬車なれば名も聞す夜いたうふかしけるにけさも暁ふかくおき出たれはをりくねふけさしぬ長池につかせたまへりかのおねふりしつることないへは宮の大夫耳とくき、つけたたまひていきたなかりつる君かなとわらひたまふけにいかみくるしかりけんこ、をいて、ほとなく井手の玉川とあらたにたてたるふたあり山ふきいさ、かさけり木津川の堤にかゝる堤のしたを行ほとまことにあつし木津川の橋馬車にてわたせたまはん

は心もとなしとてまつ御車をわたすかはのこなたにみちたる人数しらす何ことをかきふらんとよみあへり御野立にてしはしやすらはせたまへりこ、そいづみかかはなりける左の方におもしろき山のみゆるか、せ山にてみかの原はふもとの方をいふなりと人のかたる都いて、けふみかの原とよみけんころのたひちはいかなりけん今はならにも時のまにいたりつきぬへし川は、ひろくして清き流れにしはしせうやうせまほしきこ、ちすむかひにも人多くしてかはらにかあらん舟にかあらん水みえぬまで立ならひたり有かたき行啓拝まんとて遠くよりも出たる成へし木津宿にてやすらはせたまへり大夫またねふりたりやといふにいかてさはねふり侍らん井手の玉川はみつやといふにしらすとこたふさては君こそねふりたまひけぬ山吹もさきてありしをといひてわらふ

ねふしともいはぬいろなる山ふきをゆめのごてふはしらすきけんとおもへと口さかなしなといひはやしたまはんも口をしけれはいはてやみぬ奈良県になりぬ家のつくりさま人のけはひなと西京にことならず般若寺を過ればさははなり長からぬ橋をわたるほどにてよくもみす光明皇后の御浴室もかたはかりのこれりすこし行て雲井坂としるしてあれとさしも高からすみかさ山たかうそひえてかうくしう見ゆ春日野飛火野雪消沢なと芝生清らに生しけりて千とせへにけん松の村立おもしろし俱樂部につかしたまへりあたらしうたてたる家にておましはいふもさらなりすへてひろう清らなるに若くさ山ちかうみえて芝生みとりにうすく霞みたるけしきえもいはすをかし絵にうつしてたにもてかへらまほしうおほゆ圓照寺の宮法華寺の尼君なとまありたまへりくれぬれば所の人々より琴ひかせ御覽せさせんとてみやひにそうそきたるをともあまたまある親とちいかに心をつくろひてつくろひたてけむことはてぬれば産物とも御覽す東宮の鹿の角もてかへらせたまひ

てよとのたまひしをおほし出させたまひこよなうめつらしきをもとめさせたまふ今夜は人々もつかれたるへしと仰られてとく大とのこもれり

十九日晴夕くれより小雨ふるしそくめすにをとるきおき時計を見れば四時過たり打なひく雲のうちに若草山ほのかに見え初たるゑにむかへるこ、ちして物しつかなるにみたらし川の流れ庭に落くる音こ、ちよし下つかさはみなおき出たるへし水くむ音くつのおとなと聞ゆしはしたためらふほとに人々まゐりたまへりけふはまつ春日神社にまうてさせたまへりかたへのこふかきもりにうすむらさきものまつはれるは藤にかあらんといへは愛子君さしのそきたまひてかれ木のえたなるをとわらひたまふ藤はらのゆかりにまかひたるこそよかめれなとれいのまけし心にわらふ神さひたる山のうちにいつき奉れるみやるのたふとさいふもさらなり御手水奉りて玉くしとらせたまひて拜ませたまふみなみうしろにぬかつきぬやをとめの舞御覽せさすいというなり

やをとめかたちまふそてにいにしへの都のでふりおもほゆるかなみやしろの宝物とも御覽せさすかくて宮にはみこしたてまつり人々はあゆむつねには鹿のあまたあそふよしき、たるに昨日よりのにきはひにやおちけんふつに見えざりけるをけふはあまたみゆ物かはんとてよふになれてよりくるさまらうたしみこしと、めて御覽せさす

なれくてよりくるみれはかすかの、鹿は手かひのこ、ちこそすれと思ひつゝ、くる折小出祭よみて奉れり

春なから秋のみ山のみめくみをうれしと鹿も鳴ぬへきかな北島権掌侍

むかしよりかみにつかふる春日野の鹿は人にもなれにけるかなめてたくもよみたまへるかなと後に師の君もほめたまへり若草

山のふもとにさうき奉りて見わたし給ふかつらきいこま山などつねには見え侍るをあやにくにかさみ侍りぬなと人々啓すやなき原の権典侍生源寺権命婦と打つてわかくさ山にのほり給へるかうらやましさになかはまてたとりたれとこしいたければひとり、まりてわらひを折る焼たあとのみもえいて、やかぬ方はにひくさに古くさましり生しけりてふみわけかたし宮もやかてのほらせたまひてをらせ給ふうへに御覽せさせんとして分てつかねぬかのほりたまへりし人はかけもみえすいか、し給ひけんといふうちにかへりたまへりすみれをつみ柳原権典侍

露ふかきわかくさ山のすみれくさ君にみせんとつみてけるかなかへりこと聞えさせんとおもへと、のはねはやみぬ籠にて水のむあちはひことにおほゆこ、にさくらひともとさかりににほへり桂の離宮にてみし八重桜にかはらざりけり

青によしならの都をきてみれはのこれる花にうくひすのなく手向山の八幡宮にまゐり給ふ楓のわかほしけりてみつゝしそれより三月堂にいらせたまへりうしろの方にことに香華など手向たるみ像あり将門征討の折折念せさせ給ひし執金剛神なりといふ二月堂にもいらせたまひてもとの俱樂部にかへらせたまひ昼のおものきこしめして更に大仏にまうてさせ給へり本尊のみ像のいかめしさ聞しにも増りてなんありとある仏像をはじめ千年余りの軸物宝物ともあまたつらねて御覽せさすめてたき物とも多かれと心も筆も及ふへきにあらねは皆もらしつ末の方には土地の産物とも、つらねたりそれより正倉院の宝庫にわたらせたまへり聖武天皇の御料の物ともをさめさせ給へるなりと勅封にてた、人にはゆるさせたまはぬを有かたき御かけにかくろひて見奉るかしこさ更にいはん方なし

千代をへておなしみくらにつたはれるたからそくにのたから

なりけるめおよはぬ物とも物しり人になりて見奉らまほし外国人も此みくらのものをみて驚かぬものなしとなみくらもそのよにたてさせ給ひしま、にて兵火にもか、らさりきと聞こそたふとけれ興福寺猿沢の池のあたり御車のま、にてめぐらせ給へり池の玉ものとよませたまひし比は人家もなくや有けん夕つかたより大和万歳伊勢神楽薪の能楽など御覽せさす能は杜若狂言は花折也舞台は芝生にて薪の光りにみゆるさま古めておもしろしこは春日神社に奉納のさまをうつせるなりとそ大膳のつかさおももの奉る物のまれなるにいたく心をつくせるよし人のかたるを聞てうち／＼に啓しつるにたひに有てはさと人の情をこそしらまほしけれことそきて奉れと仰ことありしをもらしつるにみないたくしこまりぬとなん

廿日朝曇午前六時に出た、せたまへり今はと春日宮をふし拝む飛火野のわたり鹿のあそへるさまいとをかし右の方に高くみゆるかかつらきいこまならんとおもへとさためかたし高まとやまのふもとをゆくめてたき山のすかたなり木立すくなけれと村々とわかはさしたるかうるはしう見ゆ右の方の高ねには日かけさしなから雨ふり出たり此わたり飯あひ川わに池など有と聞けと何方ならん丸塚と書たるあれとこ、よりはみえす石上神宮も御車のうちなから拜ませ給へり丹波市にて休らひたまふ大和の神社のみまへをすく引手山はあれと車はと、まらずして三輪になりぬ神社教会所にていこはせたまいて大神にまうてさせたまふ村さめはらくとふり出たりこの山には拝殿はかりにてみやしろはなし宮

とよませたまへりみうしろにぬかつきなから
かけたかき杉のみとりのとこしへによを守るらん三輪の大神
あらはにもみかけをあふくこ、ちして高したふとし三輪の神
杉めにこそみえぬ神やますらんと香川宗匠のよみたまひしけにも

と思ひいつ初瀬川にそひてゆくこのわたりや古川のへならんとおもへと二もとの杉とおほしき見えすやう／＼はせてらにいたりていくはくともしらぬきさはしをのほる宮はみこしなり人々はかちなり雨いたくふりいてたるをからうしてのほりはてぬともし火ともしておくふかくいらせ給へり觀世音のみさう高きこと二丈許ならん人のたけはみあしに及ふまで也み堂のつくりさまむかしよりはる／＼人のまうつるもしるくみちたらひたり台よりしたを見れば人もちひさくみゆるまで高しきさはしのかたへに貫之朝臣の手栽の梅としるせるあり花そむかしのとよみ給ひしや此わたり也けんいとおほつかなし小池坊にてひるのおも聞しめすはせてらの宝物さま／＼つらねたる中に釈尊苦業のみ像有り

忍はれぬうきをしのひて雪の山たかきをしへやよにひろめけむねすみ燈台なとめつらしき物多かりもとのみちをかへらせ給ひ今夜の御泊桜井の来迎寺につかせ給ふこ、より多武峰にはのほらせ給ふ也雨ふりたるに人々のなやまんことをおほしなげかせ給ふにやかて晴わたり日影さしそめたり一の鳥居よりみこし奉る五十町余りと聞道は谷川のなかれにそひて聞しよりはさかしからす家たちつ、きて山も大かたははたとなれり

やまふかくなるともしらすみちのへにつらなる人の絶間なけれは道のかたへには枇杷の木立多く見ゆ左の方に崇峻天皇の御陵の札ありつ、らをりなる山ちに絶せぬ物は水のひと、き也

谷川のいはねにか、る水の音はこかくれたれとしるくそ有ける峰の事務所にていこはせ給ひ談山神社にまうてさせ給へりか、るたくひなき行啓につけても氏の御さかえを神もいかにうれしとおほすらん御玉くし奉らせ給ひて拝殿にて縁起の巻物宝物ともつらねて御覽せさす十三重の塔はみはか也とそ物さひたるみ有さまとも例の書とりかたし木立ものふりて雲ふかき山のおく常なら

はずこかるへきにも人のとよみ士官の駒のいな、く声さへ聞えていとききはしき夕なり桜井にかへりおはしましつるやかても雨風はけしうなりぬ今夜も里人とも琴をそうす

廿一日曇前七時にこ、をた、せ給ふ右の方につらなりたるかかつらき金剛山なりと更に多武峰をあふけはまことに高し左の方に天の香山みゆふもとに家ありて衣ほしたりとのたまはせたりけんむかしまのあたりみる心ちすなき沢のもりはいつく成らんすへて古への名所といへは大きな所にめと、むれとおもひの外なる所も有畝火山まほに見ゆいた、きにみやしろのやうなるあり神武天皇をいつき奉れりとも神功皇后をまつり奉りしともいひつたふるよし也耳なし山はいつくそくと、へとこたふる人なし

駒の引車のひ、き高けれはとへとこたへす耳なしの山勅使館にて清めさせ給ひて神武天皇の御陵にまゐらせ給ふみうしろにぬかつくかしこさいはん方なし

広まへに玉くしとりてうねひ山高きみいつをあふくけふかなと宮のよませ給ふまた柳原権典侍も

うねひ山のほりてみれば千はやふる神代もちかくおもほゆるかな安寧天皇をはしめ奉りちかきわたりの御陵み車のうちなから押し給へり檜隈川をみなから過行戸毛にてひるのおもの聞しめす此わたり古瀬村といふよし也こ、よしみこし奉る吉野郡とするしある所に緑門有り大きなさくらへのえたさしそへたり

花くはよししの、里になりぬとはさせるさくらの色にみえつ、いくへともなき山をこえ行く後醍醐天皇のむかしも此道よりやいらせ給ひけんそのころはいかにさかしかりけむなとす、ろにむかししのはれて心せまれり女官たちもしたかひ奉りて此山ち分いりしおもひかななりけんなどさまくし思ふことはたすくならずかたへの山のうへにつみたるもの有何そと、へはあれは行者

ののほること石ひとつつ、もてゆけるかつもれる也とこたふこたひの行啓に人民のみちつくりして此わたりもこえ安くなりなりなとついでにかたるか、る山奥ながら拝み奉れる人の多きはおとろくはかりなり

家かすは有ともみえぬ山陰の道のまにく人のむれたる車坂たうけに御野立ありよし野河はるかにみえ初たり郡官をめしてところくの名ともとはせ給へり右の方にみゆるか白かねかたけ何かしの山なといへと覚えす左の方にみゆるは紀の山にいていう霞みたる方そよし野なるといふ

よしの山かすみをくらくみゆるかな花は青葉になりはてぬらんこの先の下市といふ所に維盛の中將ひそみ給ひしすしや今に有なとかたるみともの人々近衛の士官さるへき限りめしてさかしき道につかれつらむなど仰こと有てきた物給ひなとす御野立のうへにおしなへてつ、し折さしたり里人の心しらひなるへしこ、よりのほりくたりて越部にてまたやすらひ給へりみちにむかへ奉れる人いよく多く学校の生徒男も女も列をた、してむかへたてまつるをこにみけしきうるはしう見えさせ給ふさるはいつくもかはることなけれとか、る山ふかき所までいたらぬくまなきをめてさせ給ふなるへし柳原権典侍

みよしの、吉野のおくにすむしつも道をしへくさつむよなりけりと誂給へることわり也

ひらけゆくまなひの道にかなしこかす、みにけりとみそなはずらんとまねひ出たるは歌にもあらさるへし芳野川のなかれにそひ行いは波たかく水のおとす、しう名高き川ともあまたわたりこしめにもことに覚ゆはしの上より見れば舟方としるして河中いろくの花をさしたり籠はなはもてつくりたる心しらひ面白しはしをこえたる所六田のよとなるよしこ、よりの坂けはしくてまる

ひ落ぬへき心ちすすこしたひらかなる方にみこしと、めていかたさしおろすさま御覽せさす早瀬をさしおろすさま時のまなりさくらの木たちむらくと見えそめたれとみな青葉になりぬ右の方につか有をみれば大塔宮にかはり奉りて戦死したる村上彦四郎義光の也けり此わたり古戦場なりけんとおもへはそ、ろに寒きこ、ちす下の一目千本に御野立有こは里人北村氏のため、まぢまうけ奉れるよしにて清らにしつらひたり花はのこらす散はてたる中にた、一もとさかりにさきにほひたるおくれし色ともみえすいとめてたしすこしあゆみ出でみるに小出ぬしも出きて常は一目千本といへとけふは千目一本也これせけふの書きところなといひしはなましひの歌よまんよりは中中にかしかりき高倉典侍

侍

春過しよしの、山の桜花君のためとや咲のこりけん柳原権典

みそなはずけふ待かほに芳野山残れる花のなつかしきかな生源寺権命婦

いてましの今日を待ちてかよしの山一もと花のちり残りたるよまてやまんも本いなければ

中々にさきおくれたる一もとの花はまれなる春にあひけりなほ多かれとさのみはとでもらしつきかりならんにはけに雪とも雲ともたとへんかたなかるへしなかさき山道にてうちんかけつらねたる里人の心つくしあはれと御覽す蔵王堂にのほり給ふ元弘のむかしかりをまのあたり聞くもそ、ろに寒しそれより吉水の神社にまゐり給ひて後醍醐天皇の御木像を拝し給ふつねに住せ給ひし方にあないしたてまつる上段には御簾かけわたして御しとねまし、世のま、に今も奉れりおくの方につねのおましとおほしき所に宸翰御手馴のみてうと、もかさりて宮司ゆゑよしも啓す余りにむねふたかれはすへりいて、外をみいたしたるに軒まで雲たちおほ

ひいと、しめりかち也宮の物にか、せ給へるを見たてまつれば村雨ははれたる今日もふりし世の宮ゐたつねて袖ぬらしけり御まみのうるほひかちにのみ見奉らる

文の上に見てもかなしきみよしの、よしの、宮をあふくけふかな逆臣の為に都をはなれさせ給へるたにあるをかう所せき所にてつひに過させ給ひにけんと今はたうらめしくも悲しくもこそかたへの木立物ふりてすこき中に村々まされる花は散はてたり柳原権典侍

宮ゐせしむかしおもへはみよし野のよし野の春もかなしかりけり生源寺権命婦

よしの山のこる宮ゐの跡とへは杉の雫も袖ぬらしけりとりく／＼にかなしうて

心有て散はてぬらん山桜花になくさむ所ならねは源義経のひそみし間ははしつかたに有りみすのまへに鏡打かけて遥拝所になし置けりとそ出る道に大きな岩にいかめしき釘打こみてあり弁慶のしわざ也とかこ、より塔尾の御陵にわたらせ給ふさかしき山路にておりてはのほりく／＼ではおり人々こうしはてぬむかひの山はみねよりふもとまで杉はかり也いかなる獣か住むらんとすこきこといふはかりなしふかき谷のはさまをつたふ水の音は聞えなから雲ふかくしてさやかに見えすみさ、きには老木くらう生しけりていと、かきくらさる、心地すをかませ給へるみ心ちいかにおはしますらん

よし野山みさ、きちかくなりぬらし散くる花も打しめりたるとよませ給へるを後にうけたまはりて更に打なかれぬむかしにかへりたる御代の光りに今そ大御心のくも、はれさせ給ふらん柳原権典侍

塔尾のみ山さひしきみさ、きに涙の外は何をたむけんすこし

くたりたる所に世恭親王のみはかあり如意輪堂にわたらせ給ふ延元帝の御木像大塔宮の御画像を拝ませ給ひまた楠氏三代の画さうをも御覧す仏像宝物とも多かる中にことにめつらしきは楠正行のやしりにてとひらに彫つけたる歌さたかにのこりて有そのをりの心おもひやるもた、今の心ちす

あつさ弓やしりの跡の万代につらぬくものはまことなりけり夕暮に竹林院につかせ給ふところはみかとの宸翰の軸あり庭のつくりさまいとおもしろきに大きなしたりさくらさへありそのかみをりくはみゆきましくける所也とぞ

よしの山花の木陰にみ心をなくさめまし、春もありけむくれ行ま、に雲ふかくなりぬれはおましのさうしさしこめけるによきくうき也なといふならんとおもひしをさすこそをかしけれとわらはせ給ふ雲にしめるをいか、はよきくうきとはいはれ侍らんとなまくすしめきて啓するもいとをこかまし高き所よりともし火のみゆるはみな此院の木立にかけつらねたる也しそく奉りなとすの所へ宮の大夫まゐり給へりさかしき山路につかれたらんとくやすらへなど仰ことあれはかしこまり給ひてた、今てんの川といへる村の人甘戸のあるしにかはりてみたりまゐり侍り後醍醐天皇の信仰せさせ給ひし観世音のみさうにしきのみはた巻物なと此村にて給はりたるをよ、のたからにひめ置侍れば御覧せさせんとてなん南北御和睦ありて都に還幸ましくつる後内よりわたらせ給ひたるは此たひはしめてにて此よし野の人々のかしこまりよるこひまことに言葉につくしかたうこそはへれ清き河にてつりたる魚生なからふかき山にてはりしはへりしわさひをも奉り此村こ、を距るこ啓し給へと申侍るになんとててもまゐり給へり此村こ、を距ること七里許にて侍りなと啓し給へはあはれなること也とて御まみのあたりうるほはせ給へりまつそのたから物をひらかせ給ひて人々

もめしつとへて見せ給ふ魚は都にましまさんには生なから奉らましをなどのたまふ村人にはこかねなと給ひしなるへしそのよのこと、も文の上にあらぬことをもかたりつたへいひ伝へて御まへにてかたり給ふにいよくたへかたし

いまま手にあせをそにきるよしの山くちをしかりしむかしかたりにこたひの御旅名所も花もさるものにて畝火山の御さ、きにまうてさせ給ひ此よしの、古宮のむかしをしたしく尋ねとはせ給ひ風土人情も知しめさんの御心おきてをうちくにか、ひしり侍りにけふはわたらせ給ふ所ことにしのひ兼させ給へるみけしき多かりき

廿一日暁にしそくまぬれと仰せらる、にむかしの夢もさめはてぬあの音は何そとのたまはする雨たりにて侍りと啓すればあなうたてかの山坂をあゆみてみともつかへんひとくいかにくるしからんなどのたまふた、せ給はんまてにはやみ侍らんなどみ心をやすめ奉る明たるころはやみたるにまたふり出たり

よしの山千もとの林分くれはわかほかをりて小雨ふりきぬみをくり奉れる人のしけさも昨日にことならす家ことに小松を引うゑあるは山吹あるはつ、しをまことにさしなとしていはひ奉れる心はへ哀れ也こしへにてひるの御まうけかねてつかうまつりたれと余りに早ければとて戸毛にて奉る道はすへて昨日のことし一時はかりに畝火山のふもとにつかせ給ひ勅使館にて清めさせ給ひてかしの原の神社にまゐらせ給ふ神殿は西京の賢所を拝殿は神嘉殿を移させ給ひたるよし也清らにかうくし綏靖天皇の御陵にもまうてさせ給へり田原本の浄照寺今夜の御やとりにてつかせ給ふところの人例の小女ともに琴ひかせてなくさめ奉るそれかまひをも御覧せさす千本桜静など吉野にゆかりある舞ともつねよりも身にしみてみななみたおとしぬ今日もとすればよしの、物語いひ出ら

る、に宮の大夫塔尾の御陵にて読たりとかたり給へるをきけは
そのかみにわれもありせは大君のしこのみたてとならましも
のを哀れにてあまた、ひ打すしぬ

廿三日前八時に出た、せ給ひて中宮寺につかせ給ふ雨いたくふり
て余りにいふせかりければとて高殿におまし、つらひてひるのみ
けたてまつるのへのけしき安くてはしちかくいて、見るにみ奉
る人々思はぬ方より近づくを制する巡査いとまなけ也住職の尼君
平松の姫君打くしてまゐり給へり法隆寺にあないたてまつる聖
靈院金堂五重塔講堂西圓堂みな御覽す聖徳太子のふたつになら
給へる年の御像よりはしめて夢と、のはてまで此みてらにこもる
へしかたはしも書きししてんとおもへとあやまちなととめんは
とみなもらしつけふはあめいたくふりて梅雨のそらに似たりみそ
もしと、にぬれさせ給へり

廿四日朝曇るけふは道遠ければとく出た、せ給はんことをおき
させ給ひて御まうけしはてたるに此頃の雨にみかさ増りて大和川
のはしそこなはれたればけふひとひととまらせたまはんことを願
ひいてんもはかりかたしと啓すあなうたてまも降出んには外の
はしもいかなることかあらんなどいふを聞しめしうへの御舟は
霧ふかくしてす、ませ給はずとうけたまはるひとひはかりと、ま
るとも何のうきことかあらんとのたまはするをかしこまりてうけ
たまはるとかくするうちに人々ちからをつくして橋つくるひはへ
りぬとけいするに九時頃に立出させ給へりつく／＼となかめさせ
給へる頃やよませたまひけん

ひよりにまつ御舟のうちやいかならん霧たちわたるあら波の上
にまことにさる御こと、うか、ひたてまつるみ車と、もに雨もふ
りいてたりかの橋のあやふけなればとてかしこくもかちよりわた
らせ給ふたつたやまは若葉みとりにつらなりて雨にぬれたるけし

き中々によし川は雨にてにこりたれとみなさる音清し四里余りの
道なるに雨いたくふりてあつき日なれば車のうちいふせし大和川
のすぢめぐり／＼て岩にあたる水のけしき何の淵とかいはまほし
柏原にてひるのおもの奉る奈良県知事をはしめ謁を賜ひ物給ひな
とすあややくなる雨にいかにか心をわつらはしけん風たちて神の音
聞ゆるに例のみ舟の上おほつかなからせ給ふ十二時三十分の汽車
にていてた、せ給ふほとなくはるかにみゆるは天王寺の塔ならん
などいふ港町の停車場になりぬれば大坂より出むかへたてまつれ
る人人おひた、しこ、より馬車にのらせ給へり都よりはしめてみ
ちのくま／＼人のむれた、ぬ所なくところ／＼に花火打あけて野
も山もさひしとおもふ処なかりしにましてこ、のにはひいはん
方なし馬車のうちいよ／＼あつし所の名もしらぬかちにて博物館
につきぬうしろの方にあらたにしつらひたる所に請し奉るおもし
ろきもの、音の聞ゆるをまく引わたしたれは見えねと府下の人々
の打よりて清楽奏するなりとぞ博物館の物とも見そなはしものと
おましにかへらせ給ひて人々の心しらひいたつらにやはとて引わ
たしたるまくとりてと仰ことありて樂きこしめすをかしきをとめ
子のけふをはれとけさうしてあたるさま花やかかてたし梅田に
とた、せ給ふ天満はしに御車と、めて花火御覽せさすみちのほと
軍人かすしらす立ならひたる大御代のみいつ更にあふかれてたふ
とし停車場の人はたいくはくならんきさよりみれば山のすかたや
うかはりておもしろきを名もしらて過行くかいとあたらし程なく
海見え初て神戸につく湊のにははひ横浜にもおとるましようおほゆ
生田のもりよなといふまに遠さかる湊川の下を今行くときげと楠
公のみやしろはみえす心のうちにかみてゆく山といふ山をめぐ
りきぬれば海のけしきことにめつらしう見わたさるすまのうらは
このわたりなるへし並木のまつ立さかえてみゆれとこのあたり家

居立つ、きてすへては畑になりぬ上野のす、きしけるへうもあらす柳原権のすけ

みくるまのうちより見ればすまの浦のまつはらこしに白波そたつおもしろくもよみ給へるかなとやらやまし一のために、近つきぬひえとりこえさかしといへと今は馬にてこえんもかたからしなと鮫島中佐かたり給へはのそき見るに軍人の心にはさおもひ給ふらむされとむかしはさかしかりけんもしらず平敦盛の塚近しときけとみえずとかくするうちに舞子につく松の木立ひいらすをかし下に小松のむら／＼生しけるなど絵に書たるやうなり行啓の爲ことにつくりたる停車場にておりさせ給ふ御やとりは河合宇兵衛か家也波上はくもりたれとあはちしまは手にとるやうに見ゆ大御舟もこ、を過ぎせ給ひしなりとうけたまはる暮行ころより波いたうあれたちてなる神の音さへ聞ゆ雨戸さ、せんなどいふまにいよ／＼ふりまさりてさうしのうちまでぬれとほりぬ霧いとふかくておなし所にと、まらせ給へるたにあるを大御舟のうちいかならんとおほしわつらはせ給ひ人々も安からず

家のうちにありてもぬる、夕立に御舟いかにと打まとひつ、うしろの方を見やれば松の木立さやかにて雨もしらす顔なりこよひの為に電気灯ともしたる也と聞えあけつるに打しふく窓を明させて御覽す九時ころよりやうやう静かになりぬれはおほとこのこもれり

廿五日てけよし暁におきいて、見れば風しつまりて波ちほの／＼としらみ行こよなう嬉し

霧はれて波打なきぬ大君の御舟のいかり今そあくらんあはちしまさやかになる頃御ひることつかうまつるけふの空にみ心もはれさせ給ふらんみけしきことによるはしいつの程にか書せ給ひけん

夢さめてみ舟のうへを思ふかなまひ子の浜の波のさわきにとあそはしてあり朝日にほひ初たるなみの上に千鳥のむれたつさま
面白し柳原権典侍

見そなはず舞子か浜の朝和におまへちかくも千鳥たつなり北島権のないし

ほの／＼と明行そらにあはち島かよふ千とりの影も見えけり望遠鏡にて見れば明石の城また大み舟と、め給ひし小豆島などかすかに見ゆけふは渚ちかくあゆませ給ひて石などひるはせ給へり人々あらそひてうるはしきをせはんとするさまよそめにはをさなくみゆるなるへし綱引御覽せざせんとしてよへよりういす一くみはあかき布にてかしらをつ、みーくみは黄にてつ、めりはるかななる方よりこきめくりて近づく声かしましきまでなりからくして引あけたるにめさましきたひなとあまたか、りぬ声々にの、しりてもてまゐるたこてふいを、は、せて御覽せざす名もしらぬいをも数しらすこはよへ花火打あけなとして魚のよりくるやうに心しらしせられしなりとそ黄なるもあまたか、りたれとちひさければはえなし小出榮より歌奉れり

あまの子かおまへにちかく引あみにけふはもれたる魚やうらみんまつ原をあゆませ給ひて松露といふものたらせ給へり五色の布も柄をつ、みたるくまでもおのおのすなかきさぐるさまそかひ／＼しき浜人ともいかにみるらんとをかしこ、の岡の上なる有栖川宮のなりとてひるの御まうけつかうまつるこ、はまた松原こしにみゆる波のけしきいはむ方なくをかしかの小豆島なとさやかになりぬ

いつのまに沖の霞は晴ぬらむしらぬをしまのあらはれにけりはうらくしまゑしまといふ島なりとそかのいをもとさるへくてうはいて、奉り人々にも給ひなとす長き御たひのみとにつかれつ

らむなとかしこき仰こと有りてみきたまふ日ころの雨に引かへて
波路の末さやかに紀の遠山打はれたるいよ／＼心ゆくさまなりけ
り

あまの子か小舟にのりてあはち鳥行めぐりてもみまほしきか
なすまでらより敦盛の青葉の笛矢に巻物そへて御覽せさすかたち
のみはなほのこれりもとの所にかへらせ給ひて産物とも御覽す県
官も謁たまはりて五時三十分のきさにてかへらせ給ふけふはみと
もの車にのりぬ海のけしきあかすをしきものから今夜は都にとお
もふ心のうれしさにるものなしまして内にのこり給ひてつれ／＼
と暮し給ふ女官たちひと日も千代の心ちしてまち奉るうれしさい
かはかりならん梅田よりさきは、しめてのみちなれは珍らしきと
ころ／＼の多からむを暮はてたれはかひなした、雨にて水かさま
さりたる田のけしきのみ見ゆ夕月のかけくろうなりたり

山のはにかたふく月のかけをみてよる行道そさひしかりける
まして木間にをり／＼みゆる火かけに心細き住処おもひやられて
あはれなりともしひかけつらねてにきはへる処にきにけりとおも
へは七条なりけり

廿六日てけよし奈良よしの、みともにもれたる人々思ふ方にあそ
ひにものせよと仰らるゝによりて小倉権のすけ樹下掌侍宇治にと
出たまへりかへり来給ひていろ／＼の物語すいと興ありその中に
樹下掌侍

舟子らにちからあはせてつかさ人ふねこくさまのおもしろき
かなとよめりしはまことにけしきみゆるこ、ちすけふはみな打つ
とひてめぐりつる処のものかたりしてなきもしわらひもしつ残り
たまへる人々いかにさう／＼しうものしたまひけむざるをりこま
そことの歌もよみ給ひぬらめとせめきこゆれば小倉権典侍雨のふ
りつ、く比よみたまへりとぞ

大君のみふねのうちはいかならむひと日もはれす雨のふるこ
ろまきれむ方なくなかめ給ひにけむとことわりなり出た、せ給へ
る時樹下のないし

出ましをいはひなからもさひしさに思はず袖をぬらしけるか
なまた霧ふかくしてみふねと、まりましますとき、て

おほきみのみふねうかふる海原になと時ならぬ霧のたつらむ
西命婦

かれ残る奈良山さくらこの春はむかしの色にさきかへるらむ
よしの山花のさかりはすきぬともにはきはぬらむ君をまちえ
てなど有命婦はならの人なれは故郷をおもふ心のことにあはれに
おほゆるなほ多かれとさのみはとて

廿七日晴前九時より織物会社高等女学校二条城などへ行啓なりみ
ともならねはみありさまはしらす伏見なる水野はま子とふらひき
たれりわかさをさなきよりつかうまつりし故御息所にさふらひて今
はの御時まてまめやかにつかうまつりし人なりそのをり別れつる
後はしめてあひたれはまつかたみになみたにむせひつきせぬむか
しかたりに時のうつるも忘れぬいまの御息所よにめてたきみ
こころはへにおはしまして御跡の御とふらひともこのる処なくせ
させ給ひむかしさふらひし人々もへたてなくあはれませ給へるこ
となどかたはしつ、かたりきかするに昔の御徳ののこり給へるな
めりなといひてまたなく

とふ人の多かる中にうれしきはなきてかたらふ友にそありけ
る津守権掌侍あたこ山にのほり給へり月輪寺の図なともてかへり
給ひて

時ならぬしくれの桜わかさはし立より袖にかゝるしらつゆ
廿八日晴午時に大みけしきうるはしう還幸まし／＼ぬ今までさう
／＼しかりつる宮のうちきぬのおとなひ人の行かひさへしけくな

りぬ宮をはしめ奉り人々ゑみのまゆひらけて御湯つかうまつり
もの奉りなとす軍人のいさましかりしこと、もおもほすことなけ
にのたまはするにをみなすらいさむこ、ちす玄海なたの波たかく
して御てう度なともまろひたるよしいかはかりしこかりけむと
更に身にしみてうかかひ奉る御たひの具よりとうてさせ給へるを
み奉れば小豆か島にて霧のふか、りし時の御製也

おもひきやあつきのしまのあさきりにゆくさきみえすなりは
てむとは廿三日にも霧ふかくして部崎にみふねと、めけるとき

鳴神のおともはけしく雨ふりて部崎のなみよをあかすかな
侍従たちもあるか中にほり川の侍従御もうけの物ともくして御
先に出たる船の波あらくしてす、まさりしとき

大み船すきぬとあふく波路には身もしつむまでおもほゆるか
なとありけるをみたまひて西四辻侍従

夕霧にいそく波路は暮はて、君におくれし心をそ思ふとあり
けにいかなるこ、ちかし給ひけむ広はた田沼の両侍従まゐりたま
ひて波あらかりつるをりのこと、も宮にもきこえあけ人々にもか
たり給ふみなたへかたきをりも侍りしかとうへはいさ、かもかは
らせ給ふことましますつかうまつることのかたはなること多か
りしも御覽しゆるさせ給ひ行幸ましつるところ、にあまねきお
ほむいつくしみのなみくならざりしこと、もかたりたまふに柳
原権典侍

みゆきますなみちのすゑのかきりなく君かみいつや打あふく
らむとよみたまへるもことわりにめてたし平戸焼のみてう度長崎
の籠甲細工のものなど宮にまゐらせ給ひ人々にも給ふ御心はへの
かたしけなくありかたさにたれも、そてをぬらしぬ
廿九日てけよしけふは大みつかれもやましますらんとみかうしも
心してけるに大みけしきうるはしうて例の時にひるのおましにい

てさせたまひてみけきこしめすさまさまのみのかたりせさせた
まへるをうけたまはるに安らかに明し暮しつる身をおもへはいと
く、かしこし三時するころよりいとまたまはりぬさるはわたく
しのたひならねはおもひのとめにたれとよになき跡とふらはてや
まむはほいなきことにおもひてうち、にねきこ、ろみつるにか
たしけなくもゆるさせたまへるなりけりこけのしたまでみめくみ
の露もらし侍らむとてまつ道のたよりよければ丸山なる徳川左衛
門佐殿のみはかにと心さす此君十六になりたまへるとし御せうと
の君の上浴にしたかひてのほりたまひけるに御いとまたまはりた
まひけるをり此君を内のみまもりにと長者町の邸にと、めさせた
まひけりひと、なりかしこくおはして文武のみちにつかく心をも
ちひたまひ故殿のみこ、ろさしをつかせたまひよろつに末たのも
しうみえたまひしをあへなくならせたまひしをりのかなしき今更
におもひ出られてなむいまはとなりたまへる時なからむ後も心は
みやこにと、まりて守り奉らむをちかき山へにはふりてよとのた
まひのこしたまへるによりて長楽寺のうへなる山にはふりまゐら
せしなり一えたの花にそへて

おほみよのはるのさかりにあはすしてをしくもちりしやまさ
くらかな坂二段はかりおりたる所に大場主膳正三輪信善原忠成服
部正子のはかありみな水手向なとするも夢の心ちすこの正子は佐
殿の生れさせたまへるとき待まうけの長に殿にめされてかしつき
まゐらせむつきのことよりはしめてよるひるとなくいそしみつつか
へまゐらせて人となりたまへるをたのしみつるかひなくなりたま
ひし後よをうきものにおもひはて、此山のふもとにくさのいほり
を結び廿余年みはかまりのやうになりて明しくらしぬ暁の雲の消
行くをみてはつれなくのこれる身をなけき入相のかねの音をき、
てはわかよのくれをまつり外の事なしなとをり、の文にいひ

おこせたるをおもひいつるもいとかなし雪あられのふる日といへ
とひと目もおこたらすまありて朝清めし花奉りなどするをこのよ
のたのしみとせりとき、てこたひそとふらはむとおもひけるをを
とつとしの冬身まかりにけりと聞くにたへかたき世をたへてける
かなとあはれにかなしう打なかれしに今碑をみればみつからかき
たる筆の跡にて歌あり

おくれても道は一すちしての山こえてふた、ひつかへまつら
むとあるをみるにもむねふたかる

なくくもなくさめはやとおもひつる君はむかしの人となり
にきわれも故御息所にわかれ奉りしころはこの人のやうにすすく
さまほしとかへすくおもひしを親王のむかしをわすれさせたま
はぬあまりにやをさなきよりさふらひし人そと分てめされつるか
たしけなさはわか身のうへかはとかしこれとありしみかけにな
すらへてつかうまつりしを此君も北方にてもむかへさせたまはむ
後ならましかはすこしはなくさむやうもあるへかりつるにと更に
かへらぬことをさへそおもふけふはひかし山のわたりはしめてな
れはよくみむとおもひたりしをこし方をのみおもひつ、けて何こ
ともおほえすかの草のいほりはあれなりと人のいふに立寄てみま
ほしけれと大徳寺におもへは心せかれてよそにみつ、ゆく五時
ころに龍光院なる有栖川宮の御はかにいたりぬ後西院帝の女御の
みはか御代々のみこたちのみはかをふしをかみてかへりぬ光照院
の尼君のまめやかにあまた、ひとふらひつるによそにすきむはほ
いなければとふらひまひらせたるに門もさしてあり明けさせて入
ぬれはよくとはれたりとてよろこひたまふことかきりなし心はか
りのあるしせむとかねていひおきつるをなとあないせさりしそと
供なるをうなせむ給ふに今までしりはへらさりしなといらへ聞
ゆるもかし夕のおこなひもなしはて給ひてさうくしきほととな

るへしおくの間にたと何くれともてなし給ふ仏殿にともなひてい
つき給へる毘沙門天の縁記宮のおはしましつるよのことなとかた
り給ふ今夜はやとりたまへあすはとくおくりまゐらせむなとせち
にのたまへと有栖川のみやのみけしきうか、ひまつらむも夜なら
てはとおもへはまかてつみこは二条の河端なる常盤樓のやとり
おはします程にて物より今かへりおはしましつるをとくまぬれと
人々のいふに参りぬ勾欄のもとにた、すませたまひて例のみけし
きうるはしうちかうめさせ給ひてさまくのみものかたり若宮の
御ふたところ西洋よりかへらせ給へること、ものたまはするけに
ことわりとうけたまはるやかてゆふけ奉りわれもたまはりぬかも
川のなかれの音す、しきにをりく千鳥のなくこゑ面白し

ほと、きすなくへくなりしかも川にいまたちとりの声の、こ
れる今すこし更けなはかしかのこえもきこえむくれぬ先にこ、の
けしきみせまほしうおもひつるをおそくもまありてけるかなとの
とまはすおもと人もいとまあるほとにて心しつかに物かたりして
九時過くるころまかてぬ

三十日曇下田学監よりみけしきうけたまはらむとて文あり長け
れはもらすうへの大演習にてのおほむさま新聞紙にをろかみてとあ
りて

おほけなくみそてにつたふ春雨のしつくやよもの海にみつら
むまたよしの、さくらみめくみの露をもまたて若葉さしぬらむと
あたらしければ

みよしの、よしの、さくら御衣にいろをゆつりて早くちりけ
む啓したまへなとありてわれには

ことのはのわかはやいかにさしそはむよしの、川のなみなら
ぬきみとかいそへたまへりわたくしのかへしはかりたにきこえむ
とおもへとあまりにまはゆくよみたまへるにこたへんかたなし

ことのはのわかはをみればよしの山ふみわけし身のはつかし
きかな鶴久子よりもたよりあり大かたのことをかきたるのみなり
ことのはの花のみやこの玉つさをおそしとひらくかひなかり
けりといひやりければ後におなし人より

ことのはのはなのみやこはかはらねと君しまさねはさひしか
りけり

五月一日ことなし

二日晴行幸啓のみとにもさふらひたまひし親王たち大臣たちを
はしめ、させたまひてうち／＼の御うたけ有り海陸の演習ことな
くすませたまへるによりて人々をねぎらひたまへるかしこき大み
こ、ろよりいてたるなるへし宮いてさせたまひて御さかつきたま
ひなとすかくて折々にはわらふ声などおましにきこゆればたけな
はになりぬらむなど仰せられておほみけしきうるはしうみ奉らる
三日雨高野保子君をはしめふるき女官たち御いとま、うしにま
りたまふおもひかけぬみゆきのうれしさも時のまに日数すきぬと
なけきたまへることわりなりみまつりことのとま、しまさぬ中
にも老をあはれませたまへる御心はへことにふかくおはしましは
それ／＼ものたまひよろつにいたはらせたまへること、もかたは
らにみ奉りてさへなみたくまる、をり／＼おほきをまして老人の
身になりては命ものひぬへきこ、ちしたまへるなるへしすこしい
とまあるほとに保子の君と紫宸殿清涼殿などにて、むかしのみ
ありさまともこまやかにとひはへりぬ

四日雨けふは供奉の士官のらういたはらせたまひてみきたまひぬ
とそこたひのうへの御いそしみは外国人もめてはやし奉りぬとき
くそありかたきざるにひとひもみあそびせさせたまふこともなく
おほむいとま／＼には先朝の御代にたてたまひしこの大内のあれ
なむことやおほしめすらむあなたこなたとみそなはしたまひて大

宮の此京にわたらせたまはむをりのためになとよろつ仰せおきて
らる、をもうけたまはるにつけても年老たる母に久しうたより
もせざりけりと今さら心くるしうおもひなりぬいやしき家よりい
て、あまねきおほむいづくしみをまのあたりにあふき奉れるかた
しけなさいかなるすくせならむとわれなからあやしきまてになむ
小出榮ぬしこ、ちそこなひたりとき、ととふらひける文のかへり
ことに

くさまくらこ、ろほそしとおもふときとはる、はかりうれし
きはなしとありけるに

もろともこ、ろほそきはくさ枕たひの道つれなやむなりけ
りとおもへとあすの還幸にこ、ろあわた、しければおくらす
五日朝雨かねておきてさせたまへることく還幸還啓の御まうけ
と、のひけるに午時近くなりて草津とやはたの鉄道雨にてい
さ、かそこなはれたればけふはと、まらせたまはむことを奏すし
はしは人々ものもいはすなりぬ仙洞御所のみそのは名高き所なる
をいとまなくてまゐらざりつるかあかすをしければたひのくの
ま、にて参りぬものさひたるみその、うちみところ多しいさ、か
高き所に人丸のみやしろあれはまうつ木立ものふりて池の上にさ
しおほひたる松のしつえはしをかけたらむやうにみゆかたへには
藤の根あらはれてあゆみかたき所ありちこか淵といへる所もあり
此わたり山の神のみやしろ有めぐりてのほれば太神のみやしる
なりむかひの堤に貫之朝臣の旧跡なりとて渡翁のたてたる碑あり
こ、をあこせかふちといふよしむかしあこせといふ女孺のしつみ
たる所なりとそ水のうつまくけしきけにも淵といふへくなくむかた
へに田あれと道水こえてゆかれす池の堤に寒水石の灯籠ありこれ
はさいつとし水戸贈大納言殿のまゆみ山よりひかせたまひて奉り
たまひしなりと殿守かいふをきくもいとうれしめつらかなる岩木

立ともおほかれと例のつくしかたくてなむ一たひ内にかへりしを
寿子きみのさそひたまへるにうれしくてまた清水寺にまうつかね
てき、つる舞台のいみしくたかきにはせてら思ひいてらるしはら
く眺望し清水焼などみて祇園のみやしろにまある丸山の左阿弥の
家にてやすらふ西山すこし晴てくれゆくけしきいとさひし

にしやまのゆふ日をくらくなりそめて都おほちに雲そた、よ
ふくれはつるころかへりまありぬ月まとかなれとくもりたれはか
ひなし

ひかし山たかねはなる、月かけをひとよはみむと思ひしもの
をかも川をつ、みやきれつらむ水音いかめしうきこゆ

六日朝晴午後一時三十分大みけしきうるはしう出立させたまへり
送り奉る人例のことし七条にて今はと京の方をかへりみて柳原権
典侍

みやこへといてたつけふもしかすかにかへりみらるるふるさ
とのそら三上山鏡山もけふはさやかかみえてひと日あそひしこと
おもひいつ田も畑も水あふれて河の中に木立あるかとみゆはかり
也菜たねもたけ麦もほにいてぬらむを日数へてつくりし人の心い
かはかりならむしつかやば軒まで水にひたりて舟にてゆきかふさ
ままことにいたはしうおほゆいふき山のもとをすくるところ

村雲はたちさはけともあし引の山のしかたのしつかなるかな
六時すくるところなこやにつかせたまへりまた雨ふりいてたれは鉄
道にことなくもかなとよもすからやすからす

七日晴雨さたまらず前七時行在所をた、せたまひた、ちにきさに
のらせたまへりみともの車にて立いつ

まかなちの車もおそくおもふまで都にいそくわかかな静岡
にて御前にまありぬ不二のねくもりたるいとくちをし

ふしのねのみえぬはかりにおほかたのけしきもかはるよしは

らのさどつかれにけむめはあきながらものもみえぬやうにをり
／＼なりぬうき鳥かはらをすくるところ

みるるところおほきたひちにかなれはみえぬふしのみうちま
もるらむこふつよりいつの海みゆ柳原権典侍

いつの海の沖の初鳥はつかにも霞の上にかひそめたる大い
そのわたり東京のつくりさまおほゆる家のをりをりみゆるはうま
人の別荘なるへし故郷ちかくなりけりとおもふうれしさかきりな
し横浜につきぬれは宮内の官員出迎へ奉れり都の方にのみかしら
おしいたしてあたりもみすなりぬ新はしにてみさきにいづれば大
宮東宮常宮いてむかへさせたまへり親王御息所をはしめ両側にな
らひたまへる人々たとへむかたなし大宮は白きうき紋の御こうち
きにくれなひの御はかま奉りてあてにけたかうみ奉らる二位の君
万里小路典侍吉田掌侍松室七等出仕などさふらひたまへり東宮の
御かたはらに曾我の大夫をはしめおこそかにさふらひたまふ陸軍
の御かさりともしたけくを、しきみありさまなり姫君はこえまさ
せたまひてうれしけにみあけたまへる御まみうつくしうみ奉らる
かく御かた／＼のみけしきうるはしうみあはせたまへる大みこ、
ろのうちいかにおはしますすらむ

ことなくてかへりきまし、うれしさにけふこそぬらせたひの
ころもを新はしよりのにきはひ都大路のけちめみえよろつよをう
たふこゑ内までつ、きぬまして宮内の人々女官たちのまちつけ奉
れるけしきいはむ方なし今夜は英国の皇族まうのほりたまはむと
てみくしききつくるひみそ奉りかへなとす

文といふものかきならひたことあらねとかうまちたるにきみとど
もつかうまつりしうれしさをかたはしたふりはとめ置んとしはし
のいとまことに石筆もてしるしたるか清うせんもきすかすにあら

ため師のみのなほしをうけてひめ置たるを一日皇后宮の御覽せさせ給ひたるかうやうのものみおへてこんとそとかしけれ主人にも奉り人々にもわかたんやうに物せよと須くたされたるにかたしけなしなどいはむはおろかにてもとよりつたなき筆にまかせたる物なれは忘れかたみにもとなひつるを人にもらさんはいとつ、ましけれとかしこきみ心にそむき奉らんとてなむかくて敦子のみに序文をこひたれは名には師の君にねき侍りしにやかてみちのつと、なつて哥にさへそへ侍りけるにたとくしき文もこのふたひらのしりにわけなからあやしうみ文たるならせられくうれしさの余りにひとことくはへおくになむ

明治廿三年

六月

権掌侍小池道子

明治二十四年二月

皇后宮職印行

権掌侍正七位小池道子著

御用製本人 吉川半七